慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パースペクティヴとメタデータ
Sub Title	
Author	久保, 仁志(Kubo, Hitoshi)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.6, No.1 (2019. 3) ,p.53- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第8回「デジタル知の文化的普及と深化に向けて」メタデータ再考 開催日時 : 2018年11月20日 (火) 14:00 ~ 17:30 開催場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス西別館1 話題提供
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000006-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

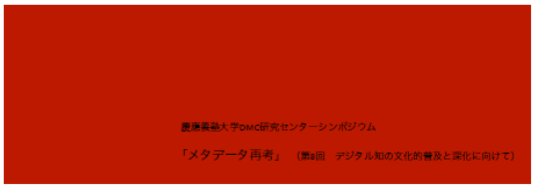
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

話題提供

「パースペクティヴとメタデータ」

久保 仁志

（慶應義塾大学アート・センター所員）



パースペクティヴとメタデータ

久保仁志（慶應義塾大学アート・センター）

本日は普段自分が関わっている知の体系とはまた違うところに迷い込んでしまった感が実はありまして、いまからする話が場違いなことにならないか若干不安でいます。

最初にお話をいただいた「メタデータ再考」という一番の主題がある。そして「ボーダレスなメタデータの利活用のために」という副題があるというときに、そもそも「メタデータ」とは何かを一つのモデルを通して提示できないかということと、ボーダーというのが、どこにどういうふうに存在するのかということを示せないかと考え、本日の発表をいたします。

これからお話しする内容は、原先生がペットボトルのお茶を使ってご説明されたことをかなりクロースアップして、末端肥大的にご紹介するような形になると思います。

パースペクティヴとメタデータ

- ライプニッツのパースペクティヴについて
- 獅子岩について

ライプニッツのパースペクティヴという概念を説明したあと、「獅子岩」と呼ばれている岩を通してパースペクティヴがどういうものなのかということをお話しさせていただければと思います。

同じ都市も、異なった方角から眺めるとまったく別の都市に見え、パースペクティヴとしては多重化されたようになるが、それと同じように、単純実体［モナド］が無限に多くあるので、その数だけ異なった宇宙が存在することになる。しかしそれらは、それぞれのモナドの異なった観点から見た唯一の宇宙のさまざまのパースペクティヴに他ならない。

ゴッドフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ「モナドロジー」西谷祐作訳『ライプニッツ著作集9：後期哲学』工作舎、1989年、230頁。

まず簡単にライプニッツの引用をしてしまいます。「同じ都市も、異なった方角から眺めるとまったく別の都市に見え、パースペクティヴとしては多重化されたようになるが、それと同じように、単純実体［モナド］が無限に多くあるので、その数だけ異なった宇宙が存在することになる。しかしそれらは、それぞれのモナドの異なった観点から見た唯一の宇宙のさまざまのパースペクティヴに他ならない」。

いまからすると「そもそも宇宙一つです

か」という問いがあるでしょうし、「多様体」という考え方があるので、「唯一の宇宙」という言葉に引っかかる方もいるかもしれませんが、ものとしてそこにあるように見える、みんなが一つとして振る舞っているものについて、これは語っているわけです。また、ライプニッツにとっては理念的な「唯一の宇宙」でもあるわけですが。

この「パースペクティヴ」について獅子岩を通して考えてみたいということです。

三重県熊野市井戸町というところに七里御浜という浜があります。スライド4の写真はそこにある岩ですが、皆さん獅子に見えますかね。人によっては獅子ではなくて、鳥のくちばしのようにも見えるという方もいたり、学生に聞いてみたらパンダとかクマとかいう人たちもいたりして、人によっておそらく見え方は違うと思うのですが。

一応、念のために説明しますと、これが（獅子の横顔とすると岩山の右上の小さな凸部を）鼻、かつ口ですね。これ（その下）はおそらくひげですね。または、これ（さらに下の大きな切れ目）を口に見立てて、（前述のひげ部分を）牙というふうに見ることもできます。

ただ、これは別にこういうふうに見ることが厳密な獅子岩ですと定義されているわけではないので、たぶんいまお話した二通りの見方で見たとしても、おそらくどちらも正解だと考えられます。

そして実はこの獅子岩は狛犬を兼ねているんです。

獅子岩がある場所というのは、井戸町という、スライド5の地図の中央部あたりなのですが、そこから結構離れた場所に大馬神社と呼ばれる社がありまして、実はこの大馬神社に狛犬は置かれていないらしいのです。神社の狛犬の代わりに、この獅子岩が用いられ、信仰の対象になっているという

ことなんです。

では実際、この獅子岩がどこから見ても獅子岩に見えるのかを検証してみましょう。

スライド6の写真は獅子岩周辺の写真をグーグルストリートビューからクリッピングしてきたものです。例えば、この地点（右上段写真）に立つと「獅子岩」には見えませんね。これをお城に見立てることもできるかもしれないですが、ただの崖に見えます。この見えの位置が「獅子岩」に対してこの位置（地図該当箇所）ですね。

初めに簡単に説明してしまいますが、この同じ方位というのかな。もう少し遠ざかって見る（右中段写真）と、実は獅子岩っぽく見えなくもないんですね。おそらく人間が実際にこの浜に降り立ってこの岩を見たときに見える姿としては、たぶんこれが一番獅子岩に見える位置だと思うのですが、先ほどスライド4でお見せした写真よりも獅子性の度合いが下がっていますよね。

これを見ると、やはりクマとかパンダというのはあながちうそではないというように感じられます。たぶんいまご覧いただいている皆さんそれぞれによっても見え方はかなり違うと思います。しかし、おそらく獅子を見いだそうとする中で、なんとなく獅子らしさみたいなものが見えてくる。

もうこれ以上近づいてしまって見上げる（スライド6の右上段写真）と、その見えは、パースペクティヴは崩れてしまう。

ほかにもいくつかあるのですが、獅子岩のように見える場所の反対側にちょうど回ってみたとき。ちなみに日本のスフィンクスなどと言われることもあるらしいのですが、これ（左上段写真）はおそらく足を折り曲げてお尻の部分を見せている獅子岩というふうに見えないこともない（笑）。だけど、そういうふうに見ることができるのは、この岩の塊を一度「獅子岩」として見た後ですよね。

そして、これ（左中段写真）はいわゆる顔の正面ですね。横顔が見えるなら正面から見ても獅子岩かというと、そうではない。のっぺりして、全然獅子岩に見えない。ただの岩の壁、岩肌しか見えない。

では、真裏に回ってみるとどうなるかと

いうと、ただの盛り上がった藪です。たぶん獅子岩と知らずにここ（左下段写真のあたり）を車で通り過ぎてしまう人は相当多いと思うんですよね。この見えしかないので。

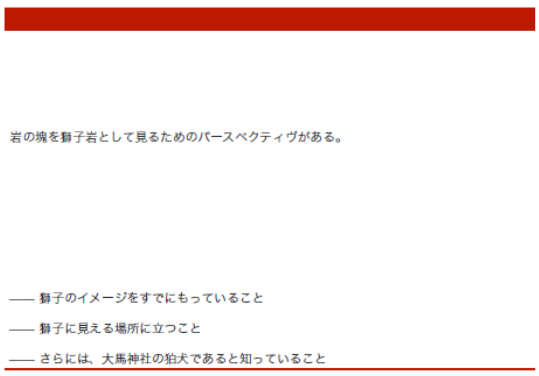
ただ奇跡的に車から獅子岩に見えるポイントというのが、実はありまして。ここなんですね（右下段写真。地図、道路上の南地点）。道路を北から南に走って来た人にとっては、知らなければ絶対に獅子岩と気づかないのですが、逆に南から北に走って来た人にとっては獅子岩と知らなくても、「ひょっとして、あれ、なんか動物っぽくない？」というような、気づきがある可能性があるパースペクティヴです。これは最初にお見せした写真の位置で、獅子岩と言われて一番納得できる位置です。

いまお話ししたのは獅子岩をどこから見るのかというアングル、空間的なパースペクティヴの問題なのですが、実は時間的なパースペクティヴにおいても、このギャップというものがありまして、スライド 7 を見て下さい。

左の写真のほうはなんとなく獅子に見えるのですが、右の写真を見ると獅子が消えてしまう。一度獅子岩に見えてしまうと不可逆的にこの写真でも獅子岩を見出してしまうかもしれませんが、この光景をはじめに見て獅子岩と見ることは難しいと思います。ここから分かるのは獅子に見えるためにはシルエットだけが獅子に見えることが条件ではないということですね。灰色だったり、光が当たっていたり、暗かったりとか、その凹凸のイメージも含めて実は獅子性というのが立ち現れている。右は夕暮れどきですが、肌理が消え、獅子らしさがなくなっているといえると思うのです。だから時間的なパースペクティヴにおいても、この獅子岩が現れるポイントがあることになる。

「獅子岩を見る際のパースペクティヴとメタデータの採取におけるパースペクティヴというのは類比的な問題」があるのではないかと思っています。別の言い方をすると、メタデータの項目というのは、まさにこのようなパースペクティヴの設定そのものなのではないかなと思います。また、メタデータの項目というのは、どこからそれを見るのか、いつそれを見るのかということ。もう少し具体的な言い方をすると、名称は何なのか、大きさはどれくらいなのか。そういう問いがメタデータの項目となりますが、その設定によってかなり現れてくるものが違ってくる。つまり、パースペクティヴやメタデータの項目とは、どのように対象にアプローチするのかという問いのことです。

もう一度、ただの岩の塊を獅子岩として見るためのパースペクティヴの条件が何であるのかと考えると、まずは獅子というものを知っていること、獅子のイメージをすでにもっていること。



これがある対象を獅子と同定するための前提条件です。次に獅子に見える場所に、見える時間に立つこと。さらには、それが単に獅子岩に見えるというだけではなく、ある種の信仰の対象としても見えるということです。(大馬神社には狛犬がなくて、この獅子岩は狛犬としての機能も持っている)。

では、この条件のうちの一つを客観的に規定できるのかを考えてみましょう。例えば、空間的座標を定めたときに、この獅子岩というものが明らかに獅子岩として立ち現れてくるのか。緯度経度を指定すれば少なくとも立つべき位置は分かる。しかし、それも実は測地系によって変わってしまいます。

震災のあと国土地理院は 2011 年に測地系を更新したようで、それに従った座標を発表しているのですが、ほかのウェブで検索できる地図は実は古い測地系に従っています（2018 年時点)。日本が今まで用いいてきたのはおよそ 3 種類ありまして、2011 年以降の「日本測地系 2011」、2002 年に採用された「世界測地系」、それ以前の「日本測地系」です。それで全部数値が変わってしまうんですね。だから、緯度経度が分かっていれば獅子岩に見えるような位置に立てるか、そのパースペクティヴに立てるかというと、実はそうではない。ある測地系に則った緯度経度が指定され、高度も、見る角度も、時間も分かってないといけないということになる。さらには、それらの誤

差や、各人の個体差の修正などのプロセスを経てようやく獅子岩のパースペクティヴが現れてくることになるはずです。

また、ボーダーの話ですがぼくは、パースペクティヴの設定の間にそれが存在すると考えています。

結論は別に特にないんですが、こういうパースペクティヴの問題というのが、メタデータを考えるときに一つ大きなきっかけになるのではないかなと思い、本日は発表させていただきました。

久保 仁志

慶應義塾大学アート・センター所員、同大学非常勤講師。アーキヴィストとして 2002 年より現在に至るまで様々な資料体の構築に携わる一方、美術理論・アーカイヴ理論・映画の研究を行い、映画作品《Cargo 1　なにかいってくれ いまさがす | 半影のモンタージュ》(2010 年) 等を制作。近著に『〈半影〉のモンタージュ：アーカイヴの一つのモチーフについて』（「JSPS 科研費 26580029」レポート、2017 年)、「ある書斎の事件記録??瀧口修造と実験室について」『NACT Review 国立新美術館研究紀要』5 号（国立新美術館、2018 年）等がある。現在、慶應義塾大学アート・センターにてアーカイヴを考えるための企画『プリーツ・マシーン』を行っている。